自衛隊の現場

あまり知られていないお仕事

航空自衛隊航空医学実験隊①

私は、航空医学実験隊（以下「医実隊」という）の航空環境における医学的調査研究を行っている第2部長を拝命しています。

医実隊は、年間を通じて部内外を問わず多くの方が来隊され、その際に受ける質問も多く、関心の高さを実感しています。

今回は、当隊を紹介できる機会をいただきましたので、日々どのような業務に携わっているのか紹介したいと思います。

医実隊は、埼玉県狭山市に所在する航空開発実験集団の隷下の部隊で、地上にて高い高度と同じ環境を再現できる低圧訓練装置（以下「チャンバー」という）、戦闘機が高機動で旋回する際に発生する加速度を再現できる遠心力発生装置、飛行時の錯覚を再現できる空間識訓練装置などの設備を持ち、航空医学研究の最先端として、操縦士の医学的な訓練（以下「航空生理訓練」という）、操縦士の医学適性審査、並びに航空環境における心理学的および医学的調査研究を行っています。

部隊の歴史は、昭和32年に陸上自衛隊東立川駐屯地に臨時航空医学実験隊として新編され、昭和33年に航空医学実験隊に改称されました。その後、逐次航空自衛隊入間基地に研究部門以外の機能を移し、令和4年に入間基地へすべての機能移転が完了しました。

医実隊を象徴する任務に、さまざまな航空環境を再現した訓練があります。戦闘機に搭乗する場合は、操縦士のみならず、すべての搭乗者は低圧低酸素環境を再現するチャンバーを使用した訓練（以下「低圧訓練」という）に合格する必要があります。

テレビ番組などで、芸能人が戦闘機などに搭乗する場面をご覧になったことがあるかと思いますが、そのすべての芸能人は、医実隊における低圧訓練に合格して、戦闘機などに搭乗しています。

低圧訓練は、座学および実体験を通じて「航空環境における人体の変化」を理解させます。座学では理論的な話をしますが、この理論を実際に自ら体験すると非常によく理解できます。

皆さんも、学校の授業は眠くても、実習で大きく理解できた経験があるかと思います。

実体験では、高度2万5000ft（約7500ｍ）で酸素マスクを外し、低酸素状態を体験します。低酸素状態になると、人間は頭の働きが低下し、足し算のような簡単な計算もできなくなります。

航空業務を行っている時は、通常は酸素マスクをしており、低酸素状態になることはありません。万が一、機械トラブルなどによって低酸素状態になった場合に、いち早く酸素吸入を開始するためには、低酸素状態に陥っていることに気付くことが重要となります。そのための訓練が低圧訓練となります。

このように、医実隊は、航空生理訓練を通じて、航空安全に貢献しています。

（以下、次月号）

（航空医学実験隊　1等空佐　高田　邦夫）

チャンバーを使用した低圧訓練

全国各地で新隊員訓練

真駒内（北海道）

新隊員約280人の教育訓練にまい進

着実に成長を遂げた自身の実力を確認

まだまだ肌寒さを感じさせる札幌市・真駒内駐屯地に所在する第120教育大隊（大隊長・池田重雄2等陸佐）では「第22期一般曹候補生」（約250人）および「令和6年度自衛官候補生」（約30人）の教育を実施中です。

新隊員約280人は、区隊長などによる指導の下、陸上自衛官として必要な知識と技能を修得すべく、日々の教育訓練にまい進中です。

特に、4月後半に行われた「10km行進訓練」「第1回教習射撃訓練」と「第1回体力検定」では、着隊して約1カ月ながらも着実に成長を遂げた自身の実力を確認することができ、自信に満ちた表情を浮かべていました。

10km行進中の新隊員

また、春季休暇直前に実施された内務点検では、皆が協力し、生活する居室や共用場所を徹底的に清掃するとともに、各人のロッカーの整理整頓など、完璧を追求して点検を受けました。

その後、約1週間の休暇が付与され実家などに帰省し、英気を養ってきたようです。

休暇終了後、リフレッシュした新隊員たちは、早速、戦闘訓練や掩体（えんたい）構築などの野外訓練を皮切りに残りの訓練に元気よく取り組んでいます。

大隊は引き続き「120教育大隊で前期教育を受けました！」と胸を張って言える、明るく元気な新隊員育成にまい進していきます。

武山（神奈川県）

入校を祝う新入生歓迎行事を実施

生徒の自主性や指導力の涵養を目的として

陸上自衛隊高等工科学校（学校長・篠村和也陸将補）は4月24日、第70期生徒の入校を祝う新入生歓迎行事を講堂で実施しました。

和太鼓部による「桜花太鼓」

生徒会主体で行われるこの行事は、新入生の歓迎のみならず、生徒の自主性や指導力を涵養させる目的があり、第3教育隊・後藤晃誠生徒を委員長とする実行委員会が、企画や調整を行いました。もちろん進行も生徒によるものです。

実行委員長のあいさつに始まり、前段は吹奏楽部による、新入生には馴染みのあるバラエティに富んだ楽曲の数々が披露されました。

後段は和太鼓部による「桜花太鼓」の演舞やドリル部によるステージ上下段を最大限に利用したダイナミックな演技など、上級生が趣向を凝らして新入生を歓迎する一生懸命な姿が印象的でした。

このほか、軽音楽部によるエネルギッシュなライブ、新入生にコミカルに年間行事を紹介したり身体を動かすレクリエーションなど、新たな環境で生活をスタートし、まだまだ戸惑いをみせる新入生たちも、今日ばかりは日々の緊張から解放され、新たな仲間とリラックスした時間を過ごすことができました。

最後に実行委員長が学校長へ終了報告した際、新入生のみならず上級生からも盛大な拍手が沸き起こり、新入生歓迎行事は大きな賑わいのうちに無事閉幕しました。

国分（鹿児島県）

新隊員の御家族に対し、訓練参観を開催

気合十分で日頃の訓練成果を発揮

第113教育大隊（大隊長・山下巧2等陸佐）は4月28日、国分駐屯地グランドで、第22期一般陸曹候補生168人のご家族などに対し、訓練参観を行いました。

基本教練を見学するご家族

この訓練参観は、ご家族などに教育の概要や福利厚生・春季休暇間の過ごし方などを説明するとともに、ご子息の成長を確認していただくことを通じて、教育に対する理解と関心を深めてもらうことを目的として例年行っているイベントです。

今回は、コロナ禍を経て、5年ぶりに開催し、約310人と多くのご家族などに参加していただき、一般陸曹候補生が入隊してから約1カ月で学んだ基本教練や、射撃予習といった訓練の様子を見学してもらいました。

ご家族などに見守られるなか、気合十分の候補生たちは、日頃の訓練成果を発揮していました。

ご家族などから「見違える程に逞しく成長したわが子の姿を見て感動しました」という感想がたくさん聞かれました。

第113教育大隊は、今後も候補生の成長を後押しして、修了式にはより一層逞しい姿をご家族などにお見せできるよう教育訓練にまい進します。

久居（三重県）

三重県防災連絡会議に参加

県と陸・海・空の自衛隊の連携強化を図る

第33普通科連隊長・金子洋幸1等陸佐は2月14日、三重県庁で実施された令和5年度防災連絡会議に参加しました。

この防災連絡会議は、三重県の主催により、県の災害対応および関係機関との連携強化に資する意見交換を実施して、県および関係機関のより一層の関係強化を図ることを目的に実施されました。

テーマに沿って意見を発表

会議は、陸上自衛隊から第10師団長（酒井秀典陸将）をはじめ航空学校長（東谷光二陸将補）、自衛隊三重地方協力本部長（水野克輝1等陸佐）および連隊長、海上自衛隊からは、横須賀地方総監（伊藤弘海将）、航空自衛隊からは中部航空方面隊司令官（門間政仁空将）、笠取山分屯基地司令（古賀真奈美2等空佐）、および白山分屯基地司令（阪屋薫1等空佐）、三重県からは県知事、危機管理統括監、三重県警察本部長などが参加しました。

会議に先立ち、元日に発災した能登半島地震への黙祷を実施し、会議参加者は哀悼の意を表しました。

会議では「大規模災害への対応および訓練成果と連携強化について」というテーマに沿って県や各部隊が実施した訓練の成果をそれぞれ発表し、同時に活発な意見交換が行われました。

令和5年度三重県防災連絡会議は県と陸・海・空の自衛隊のさらなる連携強化を図り、終了しました。

宇治（京都府）

宇治駐屯地桜まつりを開催

急遽、翌週2回目の桜祭りを開催

宇治駐屯地（駐屯地司令・平野邦治陸将補）は3月31日と4月7日に、令和6年宇治駐屯地桜まつりを開催しました。

桜を楽しむ来場者

天候に恵まれたものの、桜の開花が進まず、3月31日は2分咲きの桜が来場者を出迎えました。美しい桜を近隣の方々に見ていただき、より駐屯地に親しみをもってもらいたいとの趣旨で、翌週4月7日に2回目の桜まつりを開催し、満開に咲いた桜並木が改めて来場者を出迎えました。

急遽の開催決定となる2回目は規模を縮小し、桜並木と休憩場所の提供にとどめたものの、多くの近隣の方々に楽しんでいただけました。

2日開催した桜まつりには8000人超もの方々が来場しました。

3月31日は展望塔や資料館に売店、宇治鳳凰太鼓の演舞の他、和太鼓ふれあいイベントを実施しました。

多くの子供たちがわれ先にと太鼓の前に集まり、大きなバチを持ちづらそうに握りしめ、力いっぱい叩く姿を見て大人たちは楽しそうに微笑んでいました。

4月7日の来場者は花の美しさや香をまとい、また、この春から小学校に通うだろう子供が大きなランドセルをうれしそうに背負い、その時間を留めるように撮影する人がいたりと、それぞれにゆったりとした時間を楽しんでいるようでした。

前川原（福岡県）

開校70周年記念行事を開催

ホームカミングデーも併せて実施

陸上自衛隊幹部候補生学校（学校長・吉川徳等陸将補）は4月14日、部内外来賓、地域住民、候補生の家族など約2000人が来訪するなか、開校70周年記念行事を開催しました。

学校長の式辞

観閲式に先立ち、日頃から幹部候補生学校に協力をいただいている3人の方々と2団体に対し、学校長から感謝状が贈呈されました。

観閲式では、観閲官として学校長が学生隊長以下、学生隊の職員・候補生で構成された観閲部隊を巡閲した後に、式辞で「質実にかつ剛健に、光輝ある伝統をつぎ、つわものの誠ささげて、日本の御楯とならん。いかに過酷な状況下にあっても自らの頭で考え、部隊、隊員をしっかりと統率して任務を完遂し得る『信頼に足る幹部候補生』の育成を目標として、学校一体、本校に課せられた使命を果たして参ります」と幹部候補生学校の職員を代表して、諸先輩および地域の皆さんに対し感謝と誓いの言葉を述べました。

引き続き行われた観閲行進では、候補生が入校後の短い期間の中で練成した成果を存分に発揮し、威風堂々たる行進を披露しました。

その後、第4音楽隊と久留米信愛中学校・高等学校吹奏楽部による音楽演奏、各候補生隊対抗の剛健綱引きが行われ、血気あふれる候補生隊の剛健精神に会場は盛り上がりを見せました。

また、会場では九州所在の各部隊による装備品展示、教導隊による体験試乗、曹友会主催の子供広場、福岡地方協力本部による自衛隊ブースも賑わいを見せました。

さらに、65期本校卒業生の卒業40周年の同窓会ともいうべきホームカミングデーも併せて実施され、同期との再会を喜んでいました。

船岡（宮城県）

2年振りの団射撃競技会を実施

「実戦を意識せよ」を具現し、一発一発集中

第2施設団（団長・黒羽明陸将補）は、3月7日、宮城県に所在する王城寺原演習場基本射場で、令和5年度団射撃競技会を実施しました。

小銃射撃の様子

団としては2年振りの競技会であり、競技は「群・器材隊対抗の部」「直轄中隊等対抗の部」および「個人の部」に区分、各部隊の部隊長指定選手および任意に選ばれた選手約150人が競技に参加しました。

第2施設団の任務を踏まえ、よりレベルの高い応用射撃を取り入れて競技会を実施しました。

選手たちは12秒以内に4発という制限の中で、練成してきた成果を発揮するため、統裁官要望事項の一つである「実戦を意識せよ」を具現し、一発一発集中して射撃し、部隊のため、個人のために競技に臨んでいました。

結果は、群・器材隊対抗の部は前回に続き第104施設器材隊（隊長・手嶋2等陸佐）が優勝、直轄中隊等対抗の部は第312ダンプ車両中隊（中隊長・中山1等陸尉）が優勝。そして団優秀中隊（最高得点中隊）には第104施設器材隊架橋中隊（中隊長・小林3等陸佐）が優勝し、それぞれ勝利を掴み取りました。

また、個人の部では入隊1年目の森岸1等陸士（施設器材隊架橋中隊）が幹部・陸曹を押さえて見事第1位に輝きました。

競技会で惜しくも表彰を逃がした部隊についても、本競技会に向けて段階的に練度を積み上げ、統裁官要望事項の一つである「部隊一丸となり、勝利に向かって団結せよ」を具現、部隊長を核心として、選手およびサポート要員が団結し、部隊の士気の高揚および団結の強化につなげることができました。

善通寺（香川県）

「はな・はる・フェスタ2024」を支援

自衛隊への認識と志願者情報の獲得に寄与

第15即応機動連隊（連隊長・徳渕文雄1等陸佐）は4月14日、徳島県徳島市の藍場浜公園をメイン会場とした「はな・はる・フェスタ2024」において装備品展示を実施しました。

装備品の前でニッコリ

この事業は、新型コロナ感染症の猛威による数年間の中止を乗り越え、途絶えることなく開催し続ける徳島を代表する事業と位置づけられています。

13日と14日の2日間を通して約5万人が来場し、阿波踊り公演を中心としたステージや地域物産展、伝統工芸体験など、さまざまな企画が展開され、地域経済の活性化を図り、県内外への情報発信を行い、観光客の誘致促進を行うために開催されました。

装備品展示に参加した各隊員は、同事業の趣旨目的を理解し、地域の活性化に貢献すべく積極的に参画するとともに、訪れた来場者に対して自衛隊の活動に対する理解を深め、職業としての自衛隊への認識と志願者情報の獲得に寄与しました。

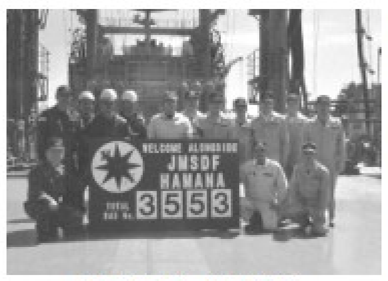
連隊は引き続きあらゆる機会を通じて自衛隊に対する信頼と協力を得るため、積極的に広報活動を実施していきます。

はまな

洋上補給（RAS）ボードを製作

就役35周年の良い記念として

補給艦「はまな」は令和7年3月29日をもって、就役35年となります。


ＲＡＳボードの前で

その1年前の令和6年3月29日現在、洋上補給（RAS：Replenishment At Sea）の累計回数が3500回を超えることに気付いた、はまな掌運用士田代准尉は、海外の補給艦が補給ステーションなどに掲示しているRASボード（洋上補給の回数を受給艦に対して示すもの）が、就役35周年の良い記念になるのではないかと考え、製作することを発案し、佐世保造修補給所工作部の協力を得て、RASボードを完成させました。

RASボードの背景は海の青色、そして文字は波の白色。星は羅針盤と任務行動艦を陰で支えていることを表す黒色。「HMN」（HAMANAの略）の文字は使命に真っ赤に燃える補給艦「はまな」の意味で赤色にデザインしました。

また、佐世保造修補給所工作部の高い技術を生かし、軽量、丈夫なアルミ素材を使用し製作することで取り扱いも容易で、洋上でも備え付け可能なものとなっています。

また、数字の入れ替えも裏から差し替える事ができ、安全な運用ができるように製作していただきました。

洋上補給時の受給艦の士気高揚だけではなく、広報でもウエルカムボードとして設置し、一般の方々の海上自衛隊の補給艦の理解促進に活用していきます。

幌別（北海道）

仕事場（演習場整備）見学会を実施

登別市長、家族会登別支部など12人が参加

第13施設群（群長・橋本隆之1等陸佐）は5月12日、北海道大演習場で、演習場春季定期整備の場を活用した仕事場見学会を実施しました。

ドーザの横で家族写真

仕事場見学会は、演習場で働く隊員や器材の見学を通じて、自衛隊の活動に対する理解を深めてもらうことを目的として実施し、登別市長、隊員ご家族、隊友会登別支部、家族会登別支部、駐屯地モニターおよび事業対象者の方々の合わせて12人に参加していただきました。

参加者は、宿営地に設営された指揮所、宿営用天幕、装備車両・器材などを見学し、食堂において、体験喫食（カレーライス）をした後、作業現場に移動しました。

ドーザの横では操縦手の隊員とその御両親が一緒に家族写真を撮影し、それを見た周りの方々は、ほっこりしていました。

参加者からは「初めて見る演習場の大きさに驚いた」「興味がある自衛隊のことをもっと知ることができて良かった」「また、参加したい」などの意見をいただき、自衛隊の活動について理解を深めるとともに、参加者との親近感を醸成することができました。

問題

数字　頭の体操㉑

今回は時計算の問題、第一弾です。6時20分の時、長針と短針との角度（鋭角）は、何度になるでしょうか？

（解答は7面に）

（出題・解説：antaka）

※漢字あそびはお休みします。

朝雲
定期購読のご案内
防衛省・自衛隊の様々なトピックスを満載した「朝雲」は、どなたでも購読できます。退官後も部隊や後輩の補職先、活躍ぶりが一目りょう然。お申し込みは下記へ。
税・送料込み　1年間契約 9,900円　半年間契約 5,500円
電話 03・3225・3841
FAX 03・3225・3831
朝雲新聞社
〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町12-20KKビル